

空を風景に

～ストリートファニチャアのひとつのあり方についての提案～

はじめに

「最近空を見えていますか？」日々業務に追われ、空を見る時間、余裕はない、そもそも空を意識するのは天気だけ、という答えが返ってきそうであるがどうであろうか？

小学生の頃、東京の真ん中で育った私は、夜な夜な友達数人で集まり天体観測と称して友達の家のも物の屋根から星空―夜空―を眺め、宇宙―空―に夢を馳せていた。しかし、東京の空は汚い上に明るいため、よくて3等星が見えるか見ない程度であった（正月とお盆だけは良く見えた）。ただ、夜空には、自分のちっぽけさや世界の広さを感じさせ、地球と宇宙を同時に感じさせる魅力があった。

しかし、大人になると同時に空を見上げる機会が減ってきていると感じる。そこで、日常の空間の中で空を風景にするというのは行き過ぎているかも知れないが、都市の中で憩う場所である公園などのオープンスペースなどでもっと空を取り込んだ風景作りを考えても面白いのではないかと感じた。

しかも、九州は、他の地域と比べて、空が美しく、地域資源ともいえる。太陽が近く、力があり、そしてとにかく青い、そこに本州と違う九州らしさというアイデンティティを見出すこともできるのではないか。そこで、この「空」という風景、資源を活かすためのちょっとした仕掛けづくりを提案する。

全国的な試みとして

日本は、高度成長期の発展と引き換えに美しい空と海を失いかけてきた。そこで、様々な分野で環境を保全、取り戻す試みがなされ、美しい空と海を取り戻しつつある。

「空」を地域の財産として活かしていく取り組みとしては、「「星空の街・あおぞらの街」全国大会」という行事が毎年開催されている。大気環境の保全についての意識を高めるとともに、地域の環境を活かした地域おこしに役立てることを目的としている。

これは、環境庁が昭和61年度に行った「あおぞら観察コンテスト」及び昭和62年度に行った「星空の街コンテスト」において選定された、「あおぞらの街」39市町村及び「星空の街」108市町村を母体に、昭和63年6月4日、北九州市での「星空の街・あおぞらの街サミット」開催に端を発す。このサミットにおいて「空を活かし空を楽しむ宣言」が採択され、「「星空の街・あおぞらの街」全国連絡会議」が結成された。その後、平成5年に「「星空の街・あおぞらの街」全国協議会」と改称された。

このようにほんの一例であるが、全国的に「空」を資源として活かしていこうという取り組みは、継続的に自治体においても行われている。

北九州市の空

「星空の街・あおぞらの街サミット」が開催された北九州市は、1901年の官営八幡製鉄所の操業以来、重化学工業地帯として発展を遂げてきた経緯もあり、高度成長期においては、煙で覆われた空が広がっていた。1969年には、日本で初めてのスモッグ警報が発令されるなど、激しい大気汚染となり、多数のぜん息患者が発生した。しかし、現在においては、本来の美しい空を取り戻している。

「空」を取り込むストリートファニチャア

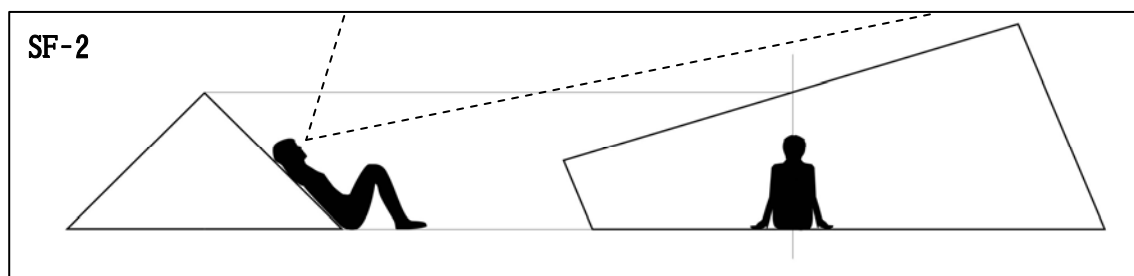
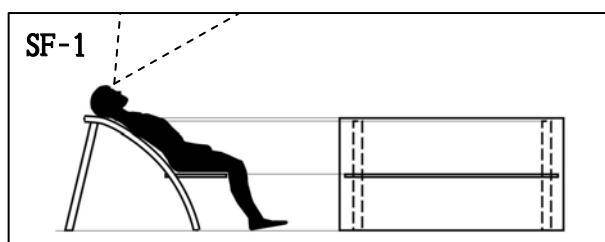
取り戻しつつある美しい空を活かした具体的な方策はないだろうかと考えたとき、人々が、憩い、くつろぐ広場、公園などのオープンスペースに美しい空を風景として活かす仕掛けをすることは、ひとつの有効策になるのではないかと考えた。特に都会の中では、ビルディングに囲まれ、変わらず存在し、日々、季節で表情を変えていく空という風景を見る機会が非常に少ないように感じる。都会の広場やオープンスペースのベンチなどで憩うとすると、目に入ってくるのは、広場内の風景、人々、周囲のビルディングや電線等である。しかし見上げるとそこには、いつも空が広がっている。

当然、広場やオープンスペースのランドスケープは、敷地内だけではなく周囲の建築物や地上物の配置により常に変化するため、周囲の環境とトータルにデザインする必要がある。しかしここでは、地面（地球）－人間－空（宇宙）をつなぐ役割を果たせるストリートファニチャアに注目し、そのあり方について、2案提案する。

視線を空に向けるストリートファニチャア

ここでは、人々の視線を「空」に向けさせるストリートファニチャアの形態を考えた。街の公園や広場で腰をかけるベンチなどは、配置されたその場を視点場とすると同時に、ベンチの形態が視線を誘導する。たいていのベンチや腰掛は、地上の風景を見るように設計されている。もっと空を意識したベンチ、腰掛けがあってもいいのではないかと考えた。そこで、通常は、正面を見るように設置されている背もたれを空に視線を向けるようにデザインする。**SF-1** は、背もたれを円弧にすることにより、背伸びするように空に視線を向けるようにデザイン。これは、普段は、背もたれを意識せずに腰をかけているベンチからふと背を合わせたくなる形態にするということがコンセプト。**SF-2** は、視線を空に向けるように両側から背もたれを向かい合わせたストリートファニチャア。これは、もう見られなく、もしくは、すること自体が困難な屋根の上から空、もしくは、星を眺めるというイメージを形態にした。

これらの配置イメージ図を次頁に示す。

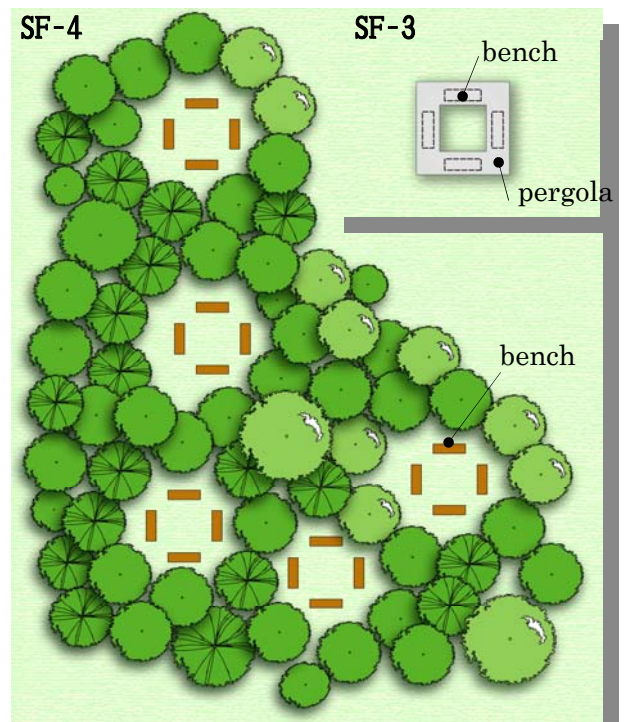




▲配置イメージ図

空を切り取るストリートファニチャ

ここでは、「空」を風景として切り取るストリートファニチャの形態を考えた。「空」は、都市であれば、周囲のビルディングや電線、山間部においては、山、川などの背景—地—として広がっている。この「地」としての「空」を「図」として見せるようにストリートファニチャに仕掛けを持たせてはどうかと考えた。**SF-3**は、上空からみたパーゴラである。パーゴラの中央部を吹き抜けにすることで、パーゴラの下に設置されたベンチから吹き抜け部を眺めると、空が切り取られたように見える。これは、パーゴラの屋根を額縁に見立て、「空」を図として切り取ることがコンセプトである。この考え方で、パーゴラを植栽に見立てたものが**SF-4**である。これは、植栽を、ベンチを周辺から取り囲むように配置したものを公園内にいくつか挿入していくというコンセプトである。こうして「空」を切り取ることで、「空」への印象が引き立つことにつながる。



おわりに

このように都市の中に、ストリートファニチャによって、地面（地球）—人間—空（宇宙）がアクセスしやすい環境を整え、子供から大人たちが空や星空を見上げて、九州の空の美しさを再認識すると同時に、気持ちもリフレッシュ、心もゆったりするような雰囲気生まれてくれればと思う。